

近 代 文 学 史

I 目次・人名索引

II 本文編

III テーマ別

IV 作品年表

V 作品名索引

目次	上段
●戯作文学	／ ■写実主義
●新体詩	／ 擬古典的写実主義
理想主義	／ 擬古典主義
●初期浪漫主義	
●「文学界」派	
観念小説	／ ■前期自然主義
■写生主義	
●中期浪漫主義	
■自然主義	
新劇運動	■文芸協会 ●自由劇場
◆高踏派Ⅱ余裕派（漱石）	
◆高踏派Ⅱ余裕派（鷗外）	
■車前草社	／ ■奇蹟派
●後期浪漫主義	／ ●スバル派
●耽美主義	／ ■自然主義「早稲田文学」派
●「白樺」派	
「新思潮」派	
■プロレタリア文学	
●新感覚派	／ ●新興芸術派
●新心理主義	／ ●「四季」派
●行動主義	
●大衆文学	／ ■転向文学
●戦後文学報国運動	／ ◎新戯作派
戦後文学	
▲第一次戦後派	
▲第二次戦後派	
▲現代小説	
23	22 21 20 19 18 18 17 16 15 14 13 12 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 2 1

下段		
啓蒙思想	1	
政治小説	1	
明六社	2	
民友社	2	
政教社	2	
「万朝報」	2	
〈記録文学〉	5	
柳田国男	5	
◆竹柏会	7	
国木田独歩	8	
〈評論〉	9	
漱石山脈	10	
谷崎潤一郎	12	
倉田百三	14	
「赤い鳥」	15	
【児童文学】	15	
宮沢賢治	17	
芥川賞・直木賞	19	
〈風俗小説〉	20	
「人民文庫」	20	
◆第三の新人	22	
【児童文学】	23	

雑誌・共作・共訳	
『新体詩抄』	2
「我楽多文庫」	2
「しがらみ草紙」	3
「めざまし草」	3
『於母影』	3
「文学界」	4
「女学雑誌」	4
「アララギ」	6
「ホトトギス」	6
「明星」	7
「心の花」	7
「青鞥」	9
「スバル」	12
「三田文学」	13
「早稲田文学」	13
「白樺」	14
「新思潮」	15
「赤い鳥」	15
「種蒔く人」	16
「文芸戦線」	16
「戦旗」	16
「文芸時代」	17
「四季」	18
「日本浪漫派」	19
「人民文庫」	20
「近代文学」	21

「記号の意味」 ● 浪漫主義的・反自然主義的

■ 自然主義的・写実的・反体制的  
冒頭↓作品冒頭・引用

●戯作文学 勸善懲惡主義

仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』 『安愚楽鍋』  
成島 柳北『柳橋新誌』

■写実主義 客観描写

坪内 逍遙『小説神髓』評論 『当世書生気質』  
『細君』 『桐一葉』

※沙翁（シェイクスピア）作品の翻訳

※「文芸協会」設立（抱月、須磨子らと） CF 新劇運動 p9

※「早稲田文学」設立 ・ 鷗外と没理想論争

二葉亭四迷『小説総論』評論 ベリンスキー（露）理論が基礎

『浮雲』 だ調・言文一致

ツルゲーネフ『あひゞき』『めぐりあい』の翻訳

『平凡』『其面影』

逍遙、四迷ともに文芸理論の作品化に失敗

言文一致

だ 調 二葉亭四迷『浮雲』

です 調 山田 美妙『武蔵野』 『夏木立』

である 調 尾崎 紅葉『二人女房』 『多情多恨』

●新体詩

『新体詩抄』▼1882M15

外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎

◆擬古典的写実主義

硯友社……機関誌「我楽多文庫」

※硯友社「明 18」尾崎紅葉を中心とする日本初の文学結社。

※明治 20年代を（紅露時代）という（尾崎「紅」葉、幸田「露」伴）

尾崎 紅葉『二人比丘尼色懺悔』 『伽羅枕』

『二人女房』 『三人妻』

『多情多恨』 『金色夜叉』

山田 美妙『武蔵野』 『夏木立』

『胡蝶』

小栗 風葉『寝化粧』 『世話女房』

巖谷 小波『こがね丸』 『日本昔噺』

理想主義／擬古典主義

幸田 露伴『露団々』 『風流伝』

『五重の塔』『天うつ波』

◆両面を持つもの

CF 別項目参照

◎右翼

▲作家毎に別傾向

#不要

▼重要な年号

啓蒙思想 （明治初期）

加藤 弘之『立憲政体略』

『人権新説』

中村正直訳（スマイルズ）

『西国立志編』

中村正直訳（ミル）

『自由之理』

福沢 諭吉『世界国尽』

『西洋事情』1866R02

『学問のすすめ』

西 周『百一新論』

『文明論之概略』

植木 枝盛『民権自由論』

中江兆民訳（ルソー）

『民約訳解』

『一年有半』

政治小説

矢野 龍溪『経国美談』

東海 散士『佳人之奇遇』

末広 鉄腸『雪中梅』

『花間鶯』

明六社 ▼1873M06

森 有礼

福沢 諭吉

加藤 弘之

中村 正直

西 周

川上音次郎「オッペケペ節」

民友社 徳富 蘇峰（平民主義）

※「国民之友」創刊

※後に国権主義に転向

※徳富蘆花の兄 兄弟で「富」・「富」

政教社 三宅 雪嶺

志賀 重昂

杉浦 重剛

井上 円了

◎「日本人」創刊

「万朝報」黒岩涙香▼1892M25

翻案・探偵小説

●初期浪漫主義

森 鷗 外「しがらみ草紙」

※森鷗外 尾崎紅葉、落合直文、幸田露伴、山田美妙

※坪内逍遙との〈没理想論争〉

↓「めざまし草」

※ドイツ三部作

『舞姫』▼ 1890M23 『うたかたの記』 『文づかひ』

アンデルセン（デ）『即興詩人』翻訳

新声社（S・S・S）スリーエス 結成

鷗外 落合直文、小金井喜美子  
翻訳詩集『於母影』

↓ 鷗外は高踏派へ CF 高踏派Ⅱ余裕派 p10

・ 創作を一時中断したが、漱石の作家活動に刺激を受けて再開。

●「文学界」派

雑誌「文学界」〔明 25 の浪漫主義的文芸グループ

前身雑誌「女学雑誌」

岩本善治、石橋忍月、内田魯庵  
山路愛山、星野天知、北村透谷

北村 透谷『楚囚之詩』『蓬萊曲』劇詩

『厭世詩家と女性』 冒頭↓

『人生に相渉るとは何の謂ぞ』評論 ※山路愛山と論争

『内部生命論』評論

上田 敏『渦巻』翻訳詩集 『海潮音』翻訳詩集

島崎 藤村『若菜集』詩 『一葉舟』詩

『夏草』詩 『落梅集』詩

※藤村は詩業が完成の域に達した後は自然主義の小説家へ CF 自然主義 p8

〔筆客〕

樋口 一葉『大つごもり』 『十三夜』

『たけくらべ』 冒頭↓『にいりあふ』

〈浪漫主義〉

M 20年代：（初期） 「文学界」派

M 30年代：（中期） 「明星」派

M 40年代：（後期） 「スバル」派

「三田文学」派

p13 p12 p7 p4

高山 樗牛……ニーチェの影響

『瀧口入道』

『美的生活を論ず』評論

内田魯庵訳（ドストエフスキイ）

『罪と罰』

恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり。

恋愛を拙き去りたらむには人生何の色味かあらむ。

（『厭世詩家と女性』）

〈キリスト教文学〉

徳富 蘆花……トルストイの影響 CF 徳富蘇峰 p2

『不如帰』（流行小説）

『思出の記』

『自然と人生』

『黒潮』

『みみずのたはごと』

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ  
溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、……

（『たけくらべ』）



● 中期浪漫主義 あさ香社 落合直文・与謝野鉄幹

新詩社の前身的結社

「明星」派 新詩社〔明32〕与謝野鉄幹の詩歌結社

機関誌「明星」（古今調）⇨根岸短歌会に対抗

与謝野鉄幹『亡国の音』 『東西南北』 『天地玄黄』

与謝野晶子『みだれ髪』 「君死にたまふことなかれ」

薄田 泣菫『暮笛集』 『二十五絃』 『白羊宮』

蒲原 有明『草わかば』 『独絃哀歌』

『春鳥集』 『有明集』

窪田 空穂『まひる野』

石川 啄木『一握の砂』 『悲しき玩具』

『あこがれ』 『時代閉塞の現状』評論

吉 井 勇『酒ほがひ』 『午後三時』

高村光太郎『道程』 『典型』 『智恵子抄』▼1941S16

萩原朔太郎『月に吠える』 『青猫』

『氷島』 『詩の原理』評論

堀口 大学『月光とピエロ』 『月下の一群』翻訳詩集

土井 晩翠『天地有情』 『曉鐘』

岡本かの子『鶴は病みき』# 『老妓抄』#

『家霊』 『生々流転』

北原 白秋『邪宗門』 『思ひ出』

『東京景物詩』（Ⅱ『雪と花火』）

『桐の花』 『雲母集』

木下奎太郎『食後の唄』 『南蛮寺門前』

佐藤 春夫『殉情詩集』 『車塵集』

CF 北原白秋、木下奎太郎、佐藤春夫はのち「三田文学」派へ p13

■ 自然主義

写実主義＋（社会小説・自己告白）＋私生活↓私小説

島崎 藤村『破戒』▼1906M39 ※本格的リアリズム 冒頭↓

『春』 『家』 『千曲川のスケッチ』随筆

『桜の実の熟する時』 『新生』 『嵐』

『夜明け前』 冒頭↓

『東方の門』 CF 詩人としての藤村（「文学界」派） p4

田山 花袋『重右衛門の最後』 『蒲団』 『田舎教師』

『生』 『妻』 『縁』

岩野 泡鳴『耽溺』

徳田 秋声『新所帯』 『微』 『爛』

『あらくれ』 『縮図』 『足迹』

『仮装人物』 CF（硯友社出身） p2

正宗 白鳥『何処へ』 『泥人形』 『微光』

『生まざりしならば』 『牛部屋の匂ひ』

CF「早稲田文学」へ p13

真山 青果『南小泉村』

会津八一『南京新唱』

『鹿鳴集』

※万葉調 和歌のひらがな表記

ちかづきて あふぎ みれども みほとけの

みそなはすとも あらぬさびしさ （八一）

柔肌の 熱き血潮に 触れもみで

寂しからずや 道を説く君 （晶子）

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

ちつと手を見る （啄木）三行書き

▼竹柏会……根岸短歌会の万葉風と新詩社の

古今風との中間。機関誌「心の花」

佐々木信綱・木下利玄・川田順

CF 北原 白秋『邪宗門』

芥川龍之介『邪宗門』

高橋 和己『邪宗門』

p24 p15

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿を思い立って、借りることにした部屋というのは、その蔵裏つづきにある二階の角のところ。寺は……（『破戒』）

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは……（『夜明け前』）

国木田独步（ロシア文学の影響）

『源をぢ』

『牛肉と馬鈴薯』

『忘れえぬ人々』

『武蔵野』

『運命論者』

『春の鳥』

『独歩集』作品集

『号外』

『運命』

『竹の木戸』

『欺かざるの記』日記

※初期のロマン主義から晩年は自然主義的になる

新劇運動

■文芸協会〔明 39〕

※坪内逍遙、島村抱月、松井須磨子等を中心とし、演劇・文学・美術の研究・実演を行う。イプセン『人形の家』、トルストイ『アンナ・カレーニナ』『復活』、シェイクスピア『ハムレット』等上演。

坪内逍遙

島村抱月・松井須磨子 のちに芸術座を作る〔大 2〕

沢田正二郎

●自由劇場〔明 42〕

※小山内薫、市川左团次（二代目）による新劇劇団。イプセン、チエホフなどの西洋近代劇を研究・実演。

小山内薫 のちに土方与志と築地小劇場を作る〔大 13〕

〈評論〉

西田幾太郎『善の研究』

和辻 哲郎『ニイチェの研究』

『古寺巡礼』

『風土』

阿部 次郎『三太郎の日記』

平塚雷鳥（明子）……女性解放運動

「元始女性は太陽であった」

※雑誌「青鞥」▼1911M4-103創刊号序文

田村俊子『あきらめ』

◆高踏派Ⅱ余裕派 （漱石・鷗外

夏目 漱石（イギリスへ留学）

『吾輩は猫である』 虚子の勧めで「ホトトギス」に寄稿

『倫敦塔』

『幻影の盾』

『薙露行』

『坊つちやん』 ↓冒頭

『濛虚集』

『草枕』 ↓冒頭

『二百十日』

『野分』

『文学論』評論

『虞美人草』 東大講師から朝日新聞社に転じた第一作

『坑夫』

『夢十夜』

※前期三部作

『三四郎』 『それから』 『門』

講演『現代日本の開化』

※後期三部作

『彼岸過迄』 『行人』 『心』 ↓冒頭

『硝子戸の中』 『道草』 『明暗』（未完）

※則天去私 天（自然）に則り、私（エゴイズム）を去る

一高の同級生、正岡子規が俳句の師であった関係で、「ホトトギス」を舞台に文壇的スタート。

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて

（『坊つちやん』）

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにく

い。（『草枕』）

（漱石山脈）漱石の弟子達 ―・木曜会

寺田 寅彦（物理学者）

鈴木三重吉（児童文学者） CF「赤い鳥」

阿部 次郎（評論家） CF『三太郎の日記』

芥川龍之介（小説家） CF「新思潮」派

久米 正雄（小説家） CF「新思潮」派

p15p15 p9 p15

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない

（『心』）

◆高踏派⇨余裕派（漱石・鷗外

森 鷗 外（ドイツへ留学）

※ドイツ三部作 CF 初期浪漫主義 p3

『舞姫』▼ 1890M23 ↓冒頭

『うたかたの記』 『文づかひ』

アンデルセン『即興詩人』翻訳 ※作家活動を一時中断

『うた日記』

『半日』 『セタ・セクスアリス』 ※発禁処分

『生田川』 CF「三田文学」派 p13

『青年』 『妄想』 『雁』

『灰燼』 『かのやうに』

ゲーテ『ファウスト』翻訳

〈歴史小説〉 乃木希典の明治天皇への殉死に刺激を受けて執筆開始

『興津弥五右衛門の遺書』 『阿部一族』

『護寺院原の敵討』 『大塩平八郎』

『堺事件』 『安井夫人』

『栗山大膳』 『山椒大夫』 ※工場法批判 ↓冒頭

『魚玄機』 ※進歩的女性を扱う

『ぢいさんばあさん』 『最後の一句』

『寒山拾得』 『高瀬舟』 ※安楽死を扱う

〈史伝〉

『澁江抽斎』 『伊澤蘭軒』

『北條霞亭』

■車前草社 自然主義短歌

尾上 柴舟『永日』

前田 夕暮『収穫』

若山 牧水『別離』

■大可磧派 CF「早稲田文学」派 p13

葛西 善藏『子をつれて』 『哀しき父』

宇野 浩二『蔵の中』 『子を貸し屋』

広津 和郎『神経病時代』

壇 一雄

●後期浪漫主義（「スバル」派・「三田文学」派）

スバル派

機関誌「スバル」

明星派中心の文芸集団。反自然主義

耽美主義・頹唐派・古今風

森鷗外・永井荷風・上田敏

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとり  
はいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。  
（『舞姫』）

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の  
一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかり  
の女で、二人の子供を連れてゐる。（『山椒大夫』）

谷崎潤一郎（耽美主義・芸術至上主義）

『異端者の悲しみ』

『痴人の愛』

『刺青』

『少年』

『麒麟』

『悪魔』

『蓼喰ふ虫』

『卍』

『盲目物語』

『古野葛』

『蘆刈』

『陰翳礼賛』 評論

『春琴抄』

『細雪』

『少将滋幹の母』

『鍵』

『瘋癲老人日記』



●耽美主義

ライバル

「三田文学」グループ（古今風）↑

↓「早稲田文学」グループ（万葉風・写実主義・自然主義）

※明治43年、永井荷風中心。雑誌「三田文学」。  
慶応義塾中心、「早稲田」文学派がライバル。

永井 荷風『すみだ川』『あめりか物語』

『ふらんす物語』『腕くらべ』  
『おかめ笹』『濯東奇譚』  
『つゆのあとさき』

森 鷗 外『生田川』

佐藤 春夫『田園の憂鬱』『殉情詩集』詩  
『都会の憂鬱』『車塵集』詩  
『晶子万陀羅』

久保田万太郎『プロログ』『春泥』

石坂洋次郎『若い人』『丘は花ざかり』  
『青い山脈』『石中先生行状記』  
『山と川のある町』  
『陽のあたる坂道』

上田 敏 CF 文学界派 p4 CF スバル派 p12  
木下 奎太郎 CF 明星派 p7  
北原 白秋 CF 明星派 p7

■自然主義 「早稲田文学」派

※明治24年、坪内逍遙を中心とする早稲田大学文学部中心。  
明治30年代に中断されるが39年に島村抱月によって再興される。

坪内 逍遙『小説神髓』評論  
『当世書生気質』『桐一葉』

島村 抱月

正宗 白鳥『何処へ』『微光』  
『泥人形』

近松 秋江『別れたる妻に送る手紙』  
『黒髪』

広津 和郎『神経病時代』

宇野 浩二『蔵の中』『子を貸し屋』

葛西 善蔵『子をつれて』『哀しき父』

※広津、宇野、葛西は私小説であり、特に破滅型・心境小説と呼ばれる。「奇蹟」派とも呼ばれる。

●「白樺」派 人道主義⇨新理想主義 機関誌「白樺」

※真・善・美の一致を目指し、耽美主義を否定。  
武者小路実篤を中心とした学習院関係者の集団。  
トルストイ（露）の影響。

武者小路実篤『お目でたき人』『その妹』

『友情』『愛と死』『幸福者』  
『人間万歳』『愛慾』『真理先生』

有島 武郎『宣言』『カインの末裔』  
『惜しみなく愛は奪う』『生まれ出る悩み』  
『小さき者へ』『或る女』『宣言一つ』  
『一房の葡萄』児

志賀 直哉『網走まで』『大津順吉』  
『清兵衛と瓢箪』『城の崎にて』（心境小説）  
『和解』『小僧の神様』『暗夜行路』

木下 利玄『紅玉』『一路』

里見 弴『善心悪心』『多情仏心』

長与 善郎『青銅の基督』『竹沢先生と云う人』

※新しき村▼明43年  
（九州宮崎県に作った芸術家村）

倉田 百三『出家とその弟子』戯  
『思索と体験』評論  
『愛と認識との出発』評論

有島三兄弟  
有島武郎  
有島生馬  
里見弴



◆「新思潮」派 新技巧派・新現実主義・理知主義・芸術至上主義  
反自然主義的・新古今的

※東京大学文学部関係者の機関誌「新思潮」による文芸集団。元来は明治四〇年に小山内薫が主宰したものであるが、文学史で言う〈新思潮派〉とは大正年間に活躍した明治中期生まれの東京帝国大学中心の若手を言う。

- 芥川龍之介 『羅生門』 『芋粥』 『鼻』  
『煙草と悪魔』 『戯作三昧』 『偷盜』  
『地獄変』 『蜘蛛の糸』 児 『奉教人の死』  
『枯野抄』 『蜜柑』  
『妖婆』 『舞踏会』 『秋』  
『杜子春』 『邪宗門』 『藪の中』  
『神々の微笑』 『トロツコ』 児  
『侏儒の言葉』 『雛』  
『或る日の大石内蔵助』 『文芸的な余りに文芸的な』  
『河童』 『或阿呆の一生』 『歯車』  
『玄鶴山房』 『西方の人』 『続西方の人』  
菊池 寛 『恩讐の彼方に』 『忠直卿行状記』  
『蘭学事始』 CF 芥川賞・直木賞創設 p19  
久米 正雄 『破船』  
山本 有三 『嬰兒殺し』 『坂崎出羽守』  
『海彦山彦』 # 『波』 『風』  
『女の一生』 『真実一路』 『路傍の石』

■プロレタリア文学 雑誌「種蒔く人」（社会主義思想）  
↓「文芸戦線」 ⇕「戦旗」

- 「文芸戦線」派  
青野 季吉 『転換期の文学』 評論  
葉山 嘉樹 『海に生くる人々』 『セメント樽の中の手紙』  
平林たい子 『施療室にて』  
「戦旗」派  
小林多喜二 『蟹工船』 『党生活者』  
徳 永 直 『太陽のない街』  
中野 重治 『中野重治詩集』 詩 『むらぎも』  
※雑誌「驢馬」を室生犀星・堀辰雄と発行 CF 転向文学 p19  
宮本 顕治 『敗北の文学』（芥川龍之介論）  
宮本百合子 『伸子』 『播州平野』  
蔵原 惟人 『リラの花』 『プロレタリア・リアリズムの道』 評論  
佐多 稲子 『キャラメル工場から』

或る日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。（『羅生門』）

- 「赤い鳥」文学運動 ※児童文学・童謡  
鈴木三重吉 cf p10  
北原 白秋 cf p7  
新美 南吉 『うた時計』 #  
『こんぎつね』 児  
『てぶくろを買いに』 #

【児童文学】

- 中 勘 助 『銀の匙』  
小川 未明 『赤い蠟燭と人魚』  
下村 湖人 『次郎物語』

- 林 芙美子 『放浪記』  
『風琴と魚の町』 #  
『晚菊』 #  
『浮雲』 #

- 野上弥生子 『真知子』  
『海神丸』  
『迷路』  
『秀吉と利休』

※林と野上とはプロレタリア文学運動に直接参加をしなかったため、プロレタリア文学の側から〈進歩的作家〉と呼ばれる。

●新感覚派 雑誌「文芸時代」 1924.13・16～ 1927.52・5 反リアリズム

※震災後の既成文体の改革を目指す語彙と詩とリズムの実験小説運動。  
立体派・未来派・ダダイズム・表現主義など二十世紀前衛芸術の受容。

横光 利一 『蠅』 『頭ならびに腹』 冒頭↓  
『御身』 『日輪』 『ナポレオンと田虫』  
『春は馬車にのって』 『機械』 『上海』  
『紋章』 『家族会議』  
『純粹小説論』 評論 『旅愁』  
川端 康成 『雪国』 『伊豆の踊り子』 冒頭↓  
『禽獣』 『名人』 『千羽鶴』  
『山の音』 『古都』 『眠れる美女』  
中川 与一 『天の夕顔』  
今 東 光 『瘦せた花嫁』 『お吟さま』 『悪名』

●新興芸術派 昭和初期モダニズム文学の集団

川端 康成 『浅草紅団』  
嘉村 磯多 『業苦』  
尾崎 士郎 『人生劇場』  
井伏 鱒二 『山椒魚』 『屋根の上のサワン』  
『ジョン万次郎漂流記』 『多甚古村』  
『本日休診』 『黒い雨』  
阿部 知二 『冬の宿』 『日月の窓』  
梶井基次郎 『檸檬』 『城のある町にて』  
『冬の日』 『冬の蠅』

●新心理主義 一九二〇年代 （昭和文学 ↓戦後文学 ↓現代文学）

※意識の流れ・内的独白により新感覚派風の印象描写を止揚

伊 藤 整 『雪明りの路』 『新心理主義文学』 評論  
『幽鬼の街』 『小説の方法』 評論  
『鳴海仙吉』 『火の鳥』 『氾濫』  
堀 辰 雄 『聖家族』 『美しい村』 『風立ちぬ』  
『菜穂子』 『大和路・信濃路』 随

●「四季」派

堀 辰 雄 CF 新心理主義 p18  
室 生 犀星 『抒情小曲集』 『愛の詩集』  
『性に目覚める頃』 『幼年時代』  
『あにいもうと』 『杏っ子』  
三好 達治 『測量船』  
丸 山 薫 『青春不在』  
萩原朔太郎 『月に吠える』 『青猫』 ※口語自由詩の完成者  
『詩の原理』 評論 『水島』  
中 原 中也 『山羊の歌』 『在りし日の歌』  
立 原 道造 『萱れ草に寄す』 『暁と夕の詩』

●行動主義

船 橋 聖一 『ダイヴィング』 『芸者小夏』  
阿 部 知二 CF 新興芸術派 p17  
伊 藤 整 CF 新心理主義 p18

真昼である。 特別急行列車は満員のまま全速力で駆けていた。 沿線の小駅は石のように黙殺された。  
（『頭ならびに腹』）

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追ってきた。

（『伊豆の踊り子』）

宮沢 賢治 『春と修羅』

『注文の多い料理店』  
『永訣の朝』  
『農民芸術概論綱要』 評論  
『イーハトーヴォの水霧』  
『雨ニモマケズ』  
『グスコブドリの伝記』  
『銀河鉄道の夜』  
『風の又三郎』  
『ゼロ弾きのゴーシュ』  
『よだかの星』

●大衆文学

中里 介山『大菩薩峠』  
吉川 英治『宮本武蔵』  
大佛 次郎『帰郷』『パリ燃ゆ』『鞍馬天狗』  
山本周五郎『よじよう』#『樅の木は残った』  
直木三十五『南国太平記』  
海音寺潮五郎『二本の銀杏』『孫子』  
長谷川 伸『夜もすがら検校』『臉の母』戯  
吉屋 信子『地の果てまでも』『良人の貞操』  
獅子 文六『自由学校』『娘と私』

■転向文学

※労働者解放運動の挫折

CFプロリタリア文学 p16

▲村山 知義『百夜』『忍びの者』私小説へ  
▲徳永 直『太陽のない街』私小説へ  
■中野 重治『村の家』穏健社会主義へ  
■島木 健作『生活の探求』『赤蛙』穏健社会主義へ  
●林 房雄『獄中記』ファシズムへ

◎日本浪漫派

機関誌「日本浪漫派」

亀井勝一郎『人間教育』#『大和古寺風物誌』評論  
太 宰 治  
林 房 雄  
神保光太郎  
萩原朔太郎

●銃後文学報国運動

小林 秀雄『様々な意匠』評論 『私小説論』評論  
『無常という事』評論 『モオツアルト』評論  
『ゴッホの手紙』評論 『近代絵画』評論  
『考へるヒント』評論 『無私精神』評論  
『本居宣長』評論  
※ランボー（仏）『地獄の季節』の翻訳  
石川 達三『蒼氓』『生きている兵隊』  
『風にそよぐ葦』  
火野 葦平『麦と兵隊』  
保田与重郎『日本の橋』『後鳥羽院』

◎新戯作派

太 宰 治『道化の華』『晩年』『富嶽百景』  
『走れメロス』『駆込み訴え』『津軽』  
『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』  
『桜桃』※桜桃忌  
伊 藤 整『小説の方法』評論 CF新心理主義 p18  
石 川 淳『普賢』『焼け跡のイエス』  
『処女懐胎』『紫苑物語』  
坂口 安吾『風博士』『墮落論』評論  
『日本文化私観』評論 『白痴』  
織田作之助『夫婦善哉』『可能性の文学』  
『土曜夫人』

菊池寛による芥川賞・直木賞の創設

芥川賞（第一回）  
石川 達三『蒼氓』  
直木賞（第一回）  
川口松太郎『鶴八鶴次郎』

三 木 清『パスカルに於ける人間の研究』#  
『人生論ノート』

※転向せず戦争直後に獄死

中 島 敦『山月記』  
『文字禍』  
『狐憑』  
『木乃伊』  
『古譚』  
『光と風と夢』  
『弟子』  
『李陵』

※カフカ（独）の影響

隴西の李徴は博学才穎、天竺の末年、若くして  
名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、…  
（『山月記』冒頭）

〈風俗小説〉  
丹羽 文雄『還らぬ中隊』  
『厭がらせの年齢』  
『顔』  
『親鸞とその妻』  
武田麟太郎『日本三文オペラ』  
『一の酉』  
『井原西鶴』

「人民文庫」

高見 順『故旧忘れ得べき』  
『如何なる星の下に』  
『いやな感じ』  
『死の淵より』詩

田宮 虎彦『霧の中』  
『落城』  
『足摺岬』  
『絵本』

田村泰次郎『肉体の門』



▲現代小説

草野 心平『蛙』

井 上 靖『闘牛』 『猟銃』 『あすなる物語』  
『風林火山』 『氷壁』 『天平の甍』  
『楼蘭』 『敦煌』 『しろばんば』  
『淀殿の日記』 『本覚坊遺文』

石原慎太郎『太陽の季節』

有吉佐和子『地唄』 『紀の川』 『香華』  
『非色』 『華岡青州の妻』 『恍惚の人』

深沢 七郎『檣山節考』

大江健三郎『死者の奢り』 『飼育』 『芽むしり仔撃ち』  
『見るまえに跳べ』 『叫び声』 『性的人間』  
『日常生活の冒険』 『個人的な体験』  
『厳粛な綱渡り』随筆 『万延元年のフットボール』

開 高 健『裸の王様』 『日本三文オペラ』

松本 清張『点と線』 『日本の黒い霧』

倉橋由美子『バルタイ』 『婚約』 『聖少女』

小田 実『何でも見てやろう』 『ガ島』  
『H I R O S H I M A』

水 上 勉『雁の寺』 『五番街夕霧楼』 『飢餓海峡』

高橋 和巳『悲の器』 『散華』 『邪宗門』  
『憂鬱なる党派』 『孤立無縁の思想』評論

吉行淳之介 CF 第三の新人 p22

北 杜 夫『榆家の人々』 ※斉藤茂吉 cf p6の息子

柴 田 翔『されどわれらが日々』

臼井 吉見『安曇野』

吉本 隆明『言語にとって美とはなにか』  
『共同幻想論』 ※吉本ばななの父

古井 由吉『杳子』

村上 龍『限りなく透明に近いブルー』

清岡 卓行『アカシアの大連』

宮 本 輝『泥の川』 『螢川』 『道頓堀川』

【児童文学】

石森 延男『コタンの口笛』 #児  
今西 祐行『肥後の石工』 #児  
木下 順二『夕鶴』 #戯曲・児  
竹山 道雄『ビルマの豎琴』 #児  
壺 井 栄『二十四の瞳』 #児

新声社	小金井喜美子	その他	野上弥生子	『真知子』 1928S03
「ホトトギス」派	中村汀女			『海神丸』 1922T11
「明星」派	与謝野晶子 「君死にたまふことなかれ」 1904M37 岡本かの子 『家霊』 1939S14 『生々流転』 1939S14	大衆文学	壺井栄	『迷路』 1937S12 『秀吉と利休』 1962S37 『二十四の瞳』 1952S27
「青鞥」	平塚らいてう 『元始女性は太陽であった』 1911M44 田村俊子 『あきらめ』 1909M42	現代小説	吉屋信子	『地の果てまっぴら』 1919T08 『良人の貞操』 1937S12
「文芸戦線」派	平林たい子 『施療室につ』 1927S02		倉橋由美子	『パルタイ』 1960S35 『婚約』 1960S35 『聖少女』 1965S40
「戦旗」派	宮本百合子 『伸子』 1924T13 『播州平野』 1946S21 佐多稲子 『キャラメル工場から』 1928S03		有吉佐和子	『地唄』 1956S31 『紀の川』 1959S34 『香華』 1961S36 『非色』 1963S38 『華岡青州の妻』 1966S41 『恍惚の人』 1972S47
その他	林芙美子 『放浪記』 1928S03 『風琴と魚の町』 1931S06 『晚菊』 1948S23 『浮雲』 1949S24	第三の新人 (三浦綾子)	曾野綾子	『遠来の客たち』 1954S29 『たまゆら』 『塩狩峠』

尾崎 紅葉	『金色夜叉』 2 頁	宮沢 賢治	『春と修羅』 17 頁
伊藤左千夫	『野菊の墓』 6 頁	★宮沢 賢治	『注文の多い料理店』 17 頁
夏目 漱石	『坊っちゃん』 10 頁	宮沢 賢治	『永訣の朝』 17 頁
森 鷗外	『阿部一族』 11 頁	宮沢 賢治	『イーハトーヴォの氷霧』 17 頁
★森 鷗外	『山椒大夫』 11 頁	宮沢 賢治	『雨ニモマケズ』 17 頁
有島 武郎	『一房の葡萄』 14 頁	宮沢 賢治	『グスコープドリの伝記』 17 頁
志賀 直哉	『小僧の神様』 14 頁	宮沢 賢治	『銀河鉄道の夜』 17 頁
志賀 直哉	『暗夜行路』 14 頁	宮沢 賢治	『風の又三郎』 17 頁
芥川龍之介	『蜘蛛の糸』 15 頁	宮沢 賢治	『セロ弾きのゴーシュ』 17 頁
芥川龍之介	『杜子春』 15 頁	宮沢 賢治	『よだかの星』 17 頁
芥川龍之介	『トロッコ』 15 頁	★小川 未明	『赤い蠟燭と人魚』 18 頁
菊池 寛	『恩讐の彼方に』 15 頁	太宰 治	『走れメロス』 20 頁
山本 有三	『真実一路』 15 頁	井上 靖	『しろばんば』 23 頁
山本 有三	『路傍の石』 15 頁	石森 延男	『コタンの口笛』 23 頁
中 勘 助	『銀の匙』 15 頁	今西 祐行	『肥後の石工』 23 頁
★新美 南吉	『ごんぎつね』 15 頁	木下 順二	『夕鶴』 23 頁
新美 南吉	『おちいさんのランプ』	木下 順二	『彦市ばなし』 23 頁
坪田 譲治	『風の中の子供』	棕 鳩 十	『孤島の野犬』
小泉 八雲	『耳なし芳一』	斉藤 隆介	『ペロ出しチョンマ』
吉野源三郎	『君たちはどう生きるか』	★下村 湖人	『次郎物語』 23 頁
川端 康成	『伊豆の踊り子』 17 頁	★竹山 道雄	『ビルマの豎琴』 23 頁
井伏 鱒二	『山椒魚』 17 頁	壺 井 栄	『二十四の瞳』 23 頁
井伏 鱒二	『屋根の上のサワン』 17 頁	壺 井 栄	『坂道』
		北 杜 夫	『榆家の人々』 24 頁
		石井 桃子	『ノンちゃん雲に乗る』

